「二十年後」（日本共産党愛知支部「赤旗」読者ニュース「虹」119号に松島武治の名で発表。

二十年後

O・ヘンリー原作
福沢正男・訳

巡回中の一人の警官が、いかにも横柄な態度を見せながら大通りを歩いていた。その横柄さは習慣によるものであって、人に見せるためのものではなかった。なぜなら見せたくても見物人はほとんどいなかったからである。時計はやっと十時を回ったところだったが、風を混じえた冷たい雨が大通りの人をほとんど追い払ってしまっていた。

彼は歩きながら家ごとの戸締りを確かめたり、複雑な技巧を要する動作によって警棒をくるくる回したり、あるいは平穏な大通りに時折用心深い目を投げやったりした。その勇ましげなスタイルと、多少肩で風を切るといった様子を持った公務員は、治安の守護者として、一幅の絵を成していた。この辺りは開くのも早いが、仕舞うのも早かった。時には煙草屋かまたは深夜営業の軽食堂の灯りを見るかも知れない、しかしほとんどの店の戸口はもうずっと以前に閉められていた。

四つ角から四つ角までのちょうど中ほどまで来たとき、ふいに警官は歩みを遅くした。暗くなった倉庫の戸口に、一人の男が火の付いていない煙草をくわえて寄りかかっていたのだ。警官がその男の所に近づいていったので、男はあわてて話しだした。

「怪しいものではありませんよ、お巡りさん」　と、彼は安心させるような口調で言った。「私は今、友達を待っているところなんですよ。二十年前の約束ですがね。あ、冗談だと思っているんでしょう？じゃあ、もしあなたが嘘でないことを確かめたいとお思いでしたら、説明致しましょう。もうずいぶん昔、今はもうありませんが、この倉庫が立っていた所に食堂があったんです――　ビッグジョーという名で、ブレディという者がやっていた食堂です」

「5年前まではあったよ」と警官は言った。「もうこわされてしまったけどね」

戸口にいる男はマッチをすって、煙草に火をつけた。その光が青ざめた顔――　四角いアゴと鋭い目、そして右の眉の近くに小さな白い傷跡のある――　を映し出した。彼のネクタイピンは、珍しい拵えの大きいダイヤであった。

「二十年前の今日」　と、男は言った。「私は一番の友人で、この世で一番素敵な仲間であるジミー・ウェルズとこの『ビッグジョー』で夕食をともにしたのです。私と彼は兄弟のようにニューヨークで育ちました。私は十八で、ジミーは二十でした。次の日の朝には、私は一儲けしようということで西部に出発するつもりでした。ジミーは自分が住むことが出来る唯一の場所がニューヨークだと考えていたので、彼をここから連れ出すことができませんでした。そこで、我々はその日からきっかり二十年後に、

たとえ我々がどんな身の上になっていようと、また、どんなに遠くから来なければならなかったとしても、再びここで会おうということを、その夜、約束したのです。二十年後には、我々の運命がどのようになっているかわからないが、いずれにしても何らかの形で結論がでているはずだと考えたわけです」

「なかなか面白い話じゃないか」　と、警官が言った。「ただ会えるまでもっと時間がかかるかも知れんがね。君は別れて以来、その友人から便りをもらったことがないかね？」

「ありますとも。我々はしばらくの間手紙のやり取りをしていました」　と、男が言った。「ところが一、二年たつと、お互いに居所ががわからなくなってしまったのです。ご承知のように、西部というところは中々面白い所でして、私は元気にあちこち仕事をして回っていたのです。しかしジミーは、もし生きているならきっと私に会いにここへ来るだろうと思います。なぜなら彼が常に世界でいちばん誠実で、かつ信頼できる古き友人だからです。彼は決して忘れてはいないでしょう。私は今夜ここにこうして立つために千マイルもの所からやってきました。彼が現れるのであればそれだけの価値がありますからね」　友を待っている男は、見事な時計を取り出した。そのふたには小さなダイヤがついていた。

「今、十時三分前です」　と、彼は時計を読み上げた。「我々がこの戸口で別れたのは、きっかり十時でした」

「西部ではかなりうまくいったようだね」　と、警官がたずねた。

「もちろんですとも！私はジミーもきっとうまくいっていると思います。とはいえ、彼は以前からこつこつ努力するタイプのいいやつだったですからねえ。私は金のために当世の凄く抜け目のない連中と競争しなければならなかったんです。ニューヨークというところは男を型にはめてしまいます。剃刀のような鋭い人間になるには西部が一番です」

警官は彼のこん棒をくるくる回して二、三歩歩き出した。

「俺は失敬するよ。あんたの友達はきっと来るよ。時間は厳守するつもりかね？」

「そんな！」　と、男が言った。「三十分は待ちますよ。ジミーがもし生きていれば、それくらいの時間で来られるでしょうから。さよなら、お巡りさん」

「おやすみ」　警官はそう言った、これまで続けてきたような調子で各玄関をチェックしながら。

細かくて冷たい霧雨が降ってきた。風も今までよりはっきりと吹いていた。あまり多くない通行人たちがコートの襟を高くし、ポケットに手を入れて先を急いでいた。そして倉庫の戸口の所で、彼の青春時代の友達とのほとんど不確かな約束を果たすために千マイルをやってきた男は煙草を吸いながら待った。

彼が二十分ほど待ったそのとき、襟を耳まで高くした長いオーバーコートを着た男が通りの反対の側から急いてよこぎった。その男はまっすぐ待っている彼のところにやってきた。

「ボブ、？」　男は、不安げに尋ねた。

「ジミー・ウェルズか？」　戸口の男が叫んだ。

「やっぱり、そうか！」　あとから来た男が相手の両手を掴んで大声を出した。「まちがいなくボブだ。まだお前が生きていればきっとここで会えると思っていたよ。よくまあ――　二十年は長いなあ。昔のレストランはなくなったよ、ボブ。俺は続いてくれることを願ってたんだが、そうすれば俺たちはまたそこで夕食をともにできたのにな。西部はどうだった、え？」

「いい所だった。俺が求めていた全てのものを与えてくれたよ。ジミー、おまえはずいぶん変わったなあ。お前が俺より二、三インチも高くなってるなんて思いもよらなかったよ」

「二十年の間にちょっと延びたのさ」

「ニューヨークじゃうまく行ってるのかい、ジミー？」

「まあまあさ。この街じゃちょっとしたもんよ。来いよ、ボブ。俺の知ってる所を案内するよ、そしてゆっくり昔の話をしようぜ。」

二人は腕を組んで通りに出た。西部でうまくいったことが自慢の男の方は、これまでの経歴のあらすじを話そうとしていた。オーバーコートを着たもう一人の男は、興味深く耳を傾けた。

薬局のある角には外灯があった。彼らがその灯りの中に入ったとき、同時にお互いの顔を見た。

突然、西部から来た方の男が立ち止まり、組んでいた腕を放した。

「お前はジミー・ウェルズじゃないな」　彼は無愛想に言った。「二十年は長い時間だ。しかし、鼻すじが通って高い顔を獅子っ鼻に変えるほどにゃ十分じゃないぜ」

「たまにゃいい男を醜男に変えることもあるさ」　と背の高い方が言った。「お前はこの十分間拘留状態にあったんだよ、怪盗『シルキー』ボブ君。お前がこの街へ立ち寄ったかも知れないとシカゴ警察が考えてね、ついてはお前と世間話がしたいんでよろしくと俺たちに電報を打ってきたんだ。おとなしく来るかね？　ものわかりがいいじゃないか。ところで、署に行く前にお前に渡すよう頼まれたメモがあるんだ。そのショーウィンドの所で読んで見ろ。巡回警官のウェールズからだ。」

西部から来た男は刑事から手渡された一枚の紙を広げた。読み始めた時の彼の手はしっかりしていたが、読み終えた時には少し震えていた。メモはほんの短いものだった。

ボブへ：　俺は時間通り約束の場所に行った。お前が煙草に火をつけたとき、その顔がシカゴ警察の探している男の顔だとわかった。俺にはお前を逮捕することができなかったので、私服の刑事を探し、彼にお前のことを頼んだのだ。